

[B年] 聖霊降臨節第10主日(2022年8月7日)**【旧約聖書日課】民数記 11章24～29節**

²⁴モーセは出て行って、主の言葉を民に告げた。彼は民の長老の中から七十人を集め、幕屋の周りに立たせた。²⁵主は雲のうちにあって降り、モーセに語られ、モーセに授けられている霊の一部を取って、七十人の長老にも授けられた。霊が彼らの上にとどまると、彼らは預言状態になったが、続くことはなかった。

²⁶宿営に残っていた人が二人あった。一人はエルグド、もう一人はメグドといい、長老の中に加えられていたが、まだ幕屋には出かけていなかった。霊が彼らの上にもとどまり、彼らは宿営で預言状態になった。²⁷一人の若者がモーセのもとに走って行き、エルグドとメグドが宿営で預言状態になっていると告げた。²⁸若いころからモーセの従者であったヌンの子ヨシュアは、「わが主モーセよ、やめさせてください」と言った。²⁹モーセは彼に言った。「あなたはわたしのためを思ってねたむ心を起こしているのか。わたしは、主が霊を授けて、主の民すべてが預言者になればよいと切望しているのだ。」

【使徒書日課】**コリントの信徒への手紙一 12章14～26節**

¹⁴体は、一つの部分ではなく、多くの部分から成っています。¹⁵足が、「わたしは手ではないから、体の一部ではない」と言ったところで、体の一部でなくなるでしょうか。¹⁶耳が、「わたしは目ではないから、体の一部ではない」と言ったところで、体の一部でなくなるでしょうか。¹⁷もし体全体が目だったら、どこで聞きますか。もし全体が耳だったら、どこでおいをかぎますか。¹⁸そこで神は、御自分の望みのままに、体の一つ一つ部分を置かれたのです。¹⁹すべてが一つの部分になってしまったら、どこに体というものがあるでしょう。²⁰だから、多くの部分があっても、一つの体なのです。²¹目が手に向かって「お前は要らない」とは言えず、また、頭が足に向かって「お前たちは要らない」とも言えません。²²それどころか、体の中でほかよりも

弱く見える部分が、かえって必要なのです。²³わたしたちは、体の中でほかよりも恰好が悪いと思われる部分を覆って、もっと恰好よくしようとし、見苦しい部分をもっと見栄えよくしようとし、見栄えのよい部分には、そうする必要はありません。神は、見劣りのする部分をいっそう引き立たせて、体を組み立てられました。²⁵それで、体に分裂が起こらず、各部分が互いに配慮し合っています。²⁶一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しみ、一つの部分が尊ばれれば、すべての部分が共に喜ぶのです。

【福音書日課】**マルコによる福音書 9章33～41節**

³³一行はカファルナウムに來た。家に着いてから、イエスは弟子たちに、「途中で何を議論していたのか」とお尋ねになった。³⁴彼らは黙っていた。途中でだれがいちばん偉いかと議論し合っていたからである。³⁵イエスが座り、十二人を呼び寄せて言われた。「いちばん先になりたい者は、すべての人の後になり、すべての人に仕える者になりなさい。」³⁶そして、一人の子供の手を取って彼らの真ん中に立たせ、抱き上げて言われた。³⁷「わたしの名のためにこのような子供の一人を受け入れる者は、わたしを受け入れるのである。わたしを受け入れる者は、わたしではなくて、わたしをお遣わしになった方を受け入れるのである。」

³⁸ヨハネがイエスに言った。「先生、お名前を使って悪霊を追い出している者を見ましたが、わたしたちに従わないので、やめさせようと思いました。」³⁹イエスは言われた。「やめさせてはならない。わたしの名を使って奇跡を行い、そのすぐ後で、わたしの悪口は言えまい。⁴⁰わたしたちに逆らわない者は、わたしたちの味方なのである。⁴¹はっきり言うておく。キリストの弟子だという理由で、あなたがたに一杯の水を飲ませてくれる者は、必ずその報いを受ける。」

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

【旧約聖書日課】民数記 11章24～29節

24モーセは出て行って民に主の言葉を告げ、また、民の長老の中から七十人を集めて幕屋の周りに立たせた。25主は雲の内において降り、モーセに語りかけ、モーセの上にある霊の一部を取って、七十人の長老に分け与えられた。霊が彼らの上にとどまると、彼らは一時の間だけ預言者のようになった〔別訳→預言したが、重ねることはなかった〕。26この時、二人の者が宿営に残っていた。一人はエルダド、もう一人はメダドと言ひ、名を記された人であったが、幕屋に出かけていなかった。この二人にも霊がとどまり、宿営で預言者のようになった。27モーセのところに若者が走って来て、「エルダドとメダドが宿営で預言者のようになっています」と告げると、28若い頃からモーセの従者であったヌンの子ヨシュアが「わが主人、モーセよ、彼らをやめさせてください」と言ったが、29モーセは言った。「あなたは私のために妬みを起こしているのか。私はむしろ、主の民すべてが預言者になり、主がご自身の霊を彼らの上に与えてくださればよいと望んでいるのだ。」

コリントの信徒への手紙一 12章14～26節

14実際、体は一つの部分ではなく、多くの部分から成っています。15足が、「私は手ではないから、体の一部ではない」と言ったところで、体の一部でなくなるでしょうか。16耳が、「私は目ではないから、体の一部ではない」と言ったところで、体の一部でなくなるでしょうか。17もし体全体が目だったら、どこで聞きますか。もし全体が耳だったら、どこで嗅ぎますか。18そこで神は、御心のままに、体に一つ一つの部分を置かれたのです。19すべてが一つの部分であったら、体はどこにあるのでしょうか。20しかし実際は、多くの部分があっても、体は一つなのです。21目が手に向かって「お前は要らない」とは言えず、また、頭が足に向かって「お前たちは要らない」とも言えません。22それどころか、体の中でほかよりも弱く見える部分が、かえって必要なのです。

23私たちは、体の中でつまらないと思える部分にかえって尊さを見いだします。実は、格好の悪い部分が、かえって格好の良い姿をしているのです。24しかし、格好の良い部分はそうする必要はありません。神は劣っている部分をかえって尊いものとし、体を一つにまとめ上げてくださいました。25それは、体の中に分裂が起こらず、各部分が互いに配慮し合うためです。26一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しみ、一つの部分が尊ばれば〔別訳→栄光を受ければ〕、すべての部分が共に喜ぶのです。

マルコによる福音書 9章33～41節

33一行はカファルナウムに來た。家に着いてから、イエスは弟子たちに、「道で何を論じていたのか」とお尋ねになった。34彼らは黙っていた。道々、誰がいちばん偉いかと言い合っていたからである。35イエスは座って、十二人を呼び寄せて言われた。「いちばん先になりたい者は、すべての人の後になり、すべての人に仕える者になりなさい。」36そして、一人の子どもを連れて来て、彼らの真ん中に立たせ、抱き寄せて言われた。37「私の名のためにこのような子どもの一人を受け入れる者は、私を受け入れるのである。私を受け入れる者は、私ではなくて、私をお遣わしになった方を受け入れるのである。」

38ヨハネがイエスに言った。「先生、あなたのお名前を使って悪霊を追い出している者を見ましたが、私たちに従わないので、やめさせました。」39イエスは言われた。「やめさせてはならない。私の名を使って奇跡を行い、そのすぐ後で、私の悪口は言えまい。40私たちに逆らわない者は、私たちの味方なのである。41よく言うておく。あなたがたがキリストに属する者だという理由で、一杯の水を飲ませてくれる人は、必ずその報いを受ける。」

黙想のためのノート**次主日教会暦と聖書日課について**

・8月7日「聖霊降臨節第10主日」の日課主題は「キリストの体」。『聖書』は、神に従う人の立ち位置を常に「信仰共同体」に基礎づけられるものとして描いている。「旧約」における「信仰共同体」は、「イスラエル」あるいは「神の民」という表象・概念で示される。「新約」では、「旧約」を継承した「イスラエル」や「神の民」の新しい枠組みとして「教会」が提示され、この「教会」を定義づけるための新しい表象として「キリストの体」という概念が用いられている。

・旧約聖書日課は、「民数記」から、モーセの導く民の長老に主の霊が授けられたという逸話の箇所。使徒書日課は、「コリントの信徒への手紙一」から、洗礼によって与えられる「聖霊の賜物」に基づいて、キリスト信者の集団が相互の関係をどのように理解し「信仰共同体」としての教会を形成していくべきか、「体」のたとえを用いて教える箇所。福音書日課は、主イエスの弟子たちが相互にどのような関係を築き、共同体における配慮が為されるべきかを教える箇所。

・当日は、教団行事暦の「平和聖日」であるが、主日聖書日課は「聖霊降臨節第10主日」に則る。信仰共同体のあり方を示す主日聖書日課を基礎として、キリスト者・教会にとっての「平和」の方向性を黙想する。

旧約日課(民数記 11章より)

・「民数記」は、ユダヤ正典「律法」の第四巻で、「出エジプト記」から「申命記」に至る「モーセ物語」を構成する第三の書。「モーセ物語」は、エジプト脱出から始まって、シナイ契約、荒れ野の旅を経て、約束の地に至る直前までの物語として構成され、約束の地・カナンに入る「イスラエル」が訓練を経て「神の民」として形成される物語として描かれる。「民数記」は、この「モーセ物語」の展開が具体的に進展する様子を、二つの側面から描いている。一つは、「世代交代」による進展で、1~25章ではエジプト以来の第一世代が、26章以下では第二世代が描かれる。二つ目は、地理的な背景による進展で、1~10章では「シナイの荒野滞在期間」、11~21章では「シナイからモアブの荒野に至る移動期間」、22章以下では「モアブの荒野に滞在しカナンに入るための準備期間」として描かれる。

・日課箇所の、シナイの荒野から移動し始めてまもない時期のイスラエルが、モーセの下でどのような共同体運営の体制を目指したのかを示唆する逸話として置かれている。モーセは、『旧約』において、「律法授与者(代理人)」としての位置づけと、「預言者」としての位置づけが混在する。本質的には「律法授与者(代理人)」として位置づけられていると見ることができるが、この立ち位置を、後代の「預言者」と結びつける意図で、「預言者」としての「モーセ」の描写がされているものと考えられる。「律法」で「モーセ」は、最大にして無比の「預言者」とされる(申 34:10)。

・一方で、モーセに続く指導者も「律法授与者であるところの預言者」であるべきだとする思想が、正典「律法と預言者」の枠組みを構成していると見ることができる。モーセの無比性にも関わらず、「モーセが代理人として授与した律法を再授与し続ける預言者」が、モーセの後継者としての「預言者」たり得るとされる。

・日課箇所は、モーセに代わり得る「預言者」の本質を「主が霊を授けた者」として描くが、その「霊」は飽くまで「モーセに授けられている霊」の分与として明確化される。元来、古代オリエントの宗教世界では、「霊の授与」を権威の源泉とする「預言者」や「先見者」が、「祭司」集団の核に存在してきた。「知恵・知識の担い手」としての宗教集団が自らの権威を正当化するためには、その知恵や知識を超越的な存在から得る手段として「霊の授与」の位置づけが不可欠であったと考えられる。一方、そのような宗教集団の権威・権力と互恵的関係を築いていった世俗権力としての王国には、「王宮」に仕える「宮廷預言者」という職位が成立した。ソロモン王によって王立エルサレム神殿が建立された南王国はもちろん、イエフ王朝時代の北王国にも、「宮廷預言者」が置かれていたことは、正典「預言者」の記述から明らかであり、なおかつ、一般に「預言者」として伝えられるほぼすべての預言者が、この「宮廷預言者」であることも間違いない(王国時代に王権から独立した在野の預言者として徹底して描かれる代表例は「エリヤ」であるが、例外的である。エリヤの後継者エリシャは、オムリ王朝打倒、イエフ王朝樹立の後ろ盾として活動することを通して、自分たちの祭司集団をイエフ王朝における宮廷預言者としての位置に押し上げたことされている)。

・日課箇所の逸話は、民の不満が噴出する中で、共同体をいかに統率するかという問題が浮上したという文脈の中に、些か唐突に置かれている。「イスラエルの歴史」は、モーセ、ヨシュアから始まり、士師の時代を経て王の統治の時代へと進み、最終的に南北両王国の統治が行き詰まる歴史として進む。日課箇所の逸話でモーセと同じ主の霊を受けた長老七十人による集団指導体制が示唆されるのは、王国滅亡・バビロン捕囚後の、エルサレム神殿祭司・長老による集団指導体制の「ユダヤ宗教共同体」の形成を見越した伏線としての意味があると考えられる。

使徒書日課(Ⅰコリント 12章より)

・「コリントの信徒への手紙一」は、使徒パウロが自ら創設に関わったコリントの教会共同体に宛てた一連の書簡の一つで、おそらく最初の書簡。コリント教会共同体は、パウロが一年半滞り住してその基礎づけがされたが、共同創設者アキラとプリスキラ夫妻を通して、ローマ教会共同体との結びつきが強く、ペトロ(ケファ)やアポロなどの影響下に置かれるようになった結果、党派的対立が生じていた。そのような状況下で、共同体内で生ずる諸問題を危惧するパウロ派の信者

が、パウロに助言を求めたのに応えて、パウロは書簡を書き記すことを重ねた。「手紙一」では、具体的な諸問題への助言を羅列した後に、パウロがコリントで意図してきた教会共同体のあるべき姿を、具体的な事柄を踏まえながら述べている。

・日課箇所は、「体のたとえ」によって共同体のあり方を教える箇所、このたとえを踏まえて、続く箇所で「キリストの体としての教会」論が提示される(27 節以下)。日課箇所そのものは、その「キリストの体としての教会」論に至る論述の過程にある。前提となっているのは、12 章冒頭から述べられている「聖霊の賜物」論(12:1~11)であり、「体のたとえ」を取り上げてから触れている「聖霊授与としての洗礼」論(12:13)である。さらに、遡って前章で述べられている「主の晩餐」についての教えにおける「主の体」も踏まえられており、「キリストの体としての教会」論が、「洗礼」と「聖餐」によって基礎づけられる共同体論であることが分かる。

福音書日課(マルコ 9 章より)

・日課箇所は、「ペトロの信仰告白」の逸話(8:27~30)から始まる一連のまとまりを持った伝承逸話群の終わりに位置する。主イエスの死と復活が予告されたことを踏まえて、復活後の弟子たちの共同体のあり方を示唆する逸話の一つとして置かれているとみることができる。逸話の前半部は、共観福音書(マタイ、マルコ、ルカ)が共通して伝えているが、後半部はマルコとルカのみが伝えている。マルコは、これに続く箇所(42~50 節)までを一つの逸話伝承としてここに置いており、マタイもそれを同様に接続させているのに対して、ルカは別の文脈に置いている。

・一連の逸話は、弟子たち自身が指導者の立場になったときに共同体をどのように営むべきかを教える逸話として構成されている。すなわち、弟子たちは「すべての人に仕える者」として、共同体内の「子供」や「小さな者」に対する最大限の配慮を為すと共に、自分たちの共同体外で「主イエスの名」によって活動する者をも尊重すべきことが教えられている。これらの逸話として伝えられることになった当初の出来事は、後の弟子たちの教会共同体を想定して起こったことではなく、飽くまで主イエスのもとで活動する弟子集団の営みの中で起こったことである。前半部で描かれる弟子同士の順位争い、主イエスが集まりの中にいた子供を抱き上げて受け入れるように教えたこと、他の集団で主イエスの名が用いられていることに対するヨハネの対応とそれに対する主イエスの態度表明など、それぞれに別個に起こった出来事が、一連の逸話としてまとめて伝承されるようになったのだろう。

・後半部の逸話では、主イエスに語る弟子が「ヨハネ」と特定されている。ヨハネは、その兄弟ヤコブと共に「ゼベダイの子」として弟子集団の中心人物の一人として知られ、この兄弟とペトロの三人が、主イエスの最側近として繰り返し描かれる。ただし、「福音書」では、

ほとんどの場面で兄弟ヤコブとセツで登場する。ヤコブとヨハネは、一行がエルサレム入りする前に、主イエスに最側近としての地位を願い出た兄弟としても知られる(10:35 以下)。初代教会においては、ペトロ系譜の教会がパウロ系譜の教会と共に主流教会を形成したが、ヤコブ・ヨハネ系譜の教会は傍流として形成され、後に主流教会に組み込まれていったと考えられ、一連の逸話は、そのような事情を反映している。

来週の誕生日(8月7日~13日)

。

主日礼拝の讚美歌から

- ・21-205 番「今日は光が」(=C2 番、I55 番)は、19 世紀英国教会司祭の J.エラートンがチェスター大聖堂用の讚美歌集のために作詞した、主日の意義を歌う讚美歌。曲は、「幼子の日(無辜の聖嬰兒の記念日)」のための讚美歌に付けられたものを転用。
- ・こどもさんびか改-34 番「キリストのへいわ」は、音大を卒業して学校教師を経た後に献身したカトリック司祭・塩田泉の作詞作曲。コロサイ 3:15 から着想。
- ・21-499 番「平和の道具と」は、フランチェスコの名を付された「平和の祈り」をもとにした歌詞。「平和の祈り」は、1912 年に発行されたカトリック信徒団体の雑誌に掲載された無名の祈りだが、後に在俗フランシスコ会が祈祷文として使用。これがプロテスタント信徒団体が「フランチェスコ」の名を付けて頒布し、教派を越えて広く用いられるようになった。

21-205「今日は光が」

This is the day of light

1. This is the day of light — / let there be light today! / Arise, O Christ, to end our night / and chase its gloom away.
2. This is the day of rest — / our inner strength renew; / on lives by many cares oppressed / send your freshening dew.
3. This is the day of peace — / with peace our spirits fill; / bid all the blasts of discord cease, / the waves of strife be still.
4. This is the day of prayer - / let earth to heaven draw near! / Lift up our hearts to seek you there; / come down to meet us here.
5. This is the first of days: / come with your living breath / and wake dead souls to love and praise, / O Victor over death!

21-499「平和の道具と」

Lord, Make Us Servants of Your Peace

1. Lord, make us servants of your peace: / where there is hate, may we sow love; / where there is hurt, may we forgive; / where there is strife, may we make one.
2. Where all is doubt, may we sow faith; / where all is gloom, may we sow hope; / where all is night, may we sow light; / where all is tears, may we sow joy.
3. Jesus, our Lord, may we not seek / to be consoled, but to console, / nor look to understanding hearts, / but look for hearts to understand.
4. May we not look for love's return, / but seek to love unselfishly, / for in our giving we receive, / and in forgiving are forgiven.
5. Dying, we live, and are reborn / through death's dark night to endless day: / Lord, make us servants of your peace, / to wake at last in heaven's light.